

大地から学ぶ越路の

おいたち



平成 21 年度 大地の会秋の講座 現地見学会 渋海川源流・深坂峠にて 平成 21 年 10 月 18 日

【主な内容】

- | | |
|---|-----------|
| H21 地学講座第 3 回 野外観察会「渋海川の源流を求めて」
- 1000 万年の大地の歴史を探る - | 新潟第四紀グループ |
| 渋海川の源流に行く
父なる山、母なる河 - 渋海川の巡検 - | 星名 松山 氏 |
| H21 地学講座第 4 回 「渋海川流域の人びとと歴史風土」
- 信濃川水系の河川文化を考える - | 五百川 清 氏 |
| 渋海川源流ツアー（(財)こしじ水と緑の会）開催報告 | 西山 拓 氏 |
| 雪像づくり皆で勝ち取った敢闘賞 | 鷲山 厚 氏 |
| 春の野外観察会のご案内 | |

渋海川の源流を求めて 1000 万年の大地の歴史を探る -

新潟第四紀グループ

越路地域の西部を貫流する渋海川、その源流の新潟・長野県境の関田山地、深坂峠まで渋海川をさかのぼり、約 1000 万年前から現在に至るまでの渋海川流域の地形や地層を観察し、大地の生い立ちを探りました。

さらに、深坂峠を東に向かって東頸城丘陵を越え、信濃川がつくった雄大な河岸段丘を眺望し、JR 宮中ダムでは取水停止により流量を取り戻した大河信濃川を実感しました。

参加者は 40 名、マイクロバス 2 台に分乗し、曇り空のもと源流の深坂峠は深い霧の中でしたが新たな発見の連続で楽しい巡検でした。

巡検ルート

荒瀬の河岸段丘：魚沼層(基盤)と段丘礫層・ローム層 塚野掘割：渋海川の瀬替え 相野原の段丘地形：中位段丘(10 万年前)と低位段丘(3 万年前) 苔野島の瀬替え：渋海川の蛇行と瀬替え 中仙田「道の駅」の SK030 火山灰：造岩鉱物と堆積機構と噴出源 中仙田南の魚沼層中部層：かつて平野に堆積した礫層 犬伏(手掘り洞門付近)魚沼層最下部層：河口に堆積したカキ化石層 松之山温泉：自噴する温泉と松之山層(古日本海の海底火山噴出物) 深坂峠：渋海川の源流 マントパークスキー場からの遠望：日本一の河岸段丘(津南段丘) 国道 17 号沿いの凹地地形：津南断層 信濃川宮中取水ダム

St. 1 荒瀬の河岸段丘



下位は傾斜した基盤の魚沼層、上位に不整合で渋海川がつくった段丘れき層と、風により運ばれた

風成堆積物(ローム層)が重なります。ローム層中には現在の鹿児島湾内にあったカルデラから噴出源した「あいら Tn 火山灰(AT)」が堆積し、そのことから 3 万年前頃にできた段丘と推定されます。この段丘礫層は信濃川がつくった段丘礫層に比べ層の厚さと広がり貧弱です。

St. 2 塚野山の瀬替え



蛇行流路を付け替えて水田にすることを瀬替といひます。明治 4 年、塚野山掘割が完成し、かつての渋海川が流れていたこ野地点が水田に生まれ変わりました。新田は当初 8 町歩(約 8ha) 余りあったようです。

(St. 4 苔野島の瀬替え)

1735 年、柏崎の宮川四郎兵衛が、対岸に見える苔野島城址のある急峻な尾根を繰り穴工法(トンネル)で切り開き、6 町歩(約 6ha) 余りの水田を開発したということです。

St. 3 相野原の中位段丘・低位段丘



渋海川により形成された河成段丘です。高い段丘は 10 万年前頃につくられた中位段丘で、低い方は 3 万年前につくられた低位段丘です。ここでの低位段丘は荒瀬の低位段丘より渋海川からは比高が低く、地盤の上昇量が小さかったことを示し

ています。

St.5 SK030 火山灰層



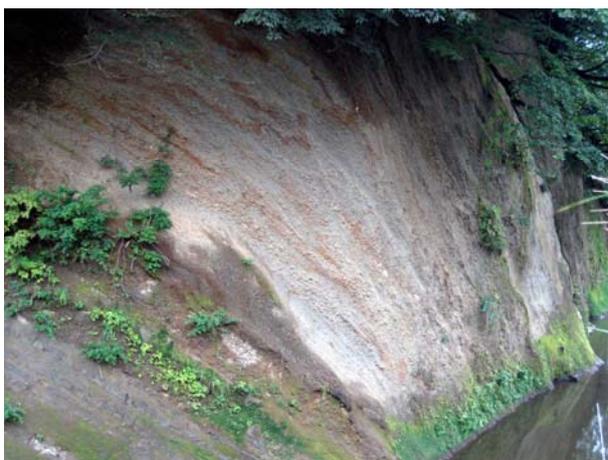
SK030 火山灰層は下位が上越火山灰層（白ザラ）、中は黒色火山灰層（黒ズナ）、上位に雑色軽石層からなります。中越全域に分布します。



白ザラは 110 万年前の大規模火砕流です。董青石という青紫色の鉱物が含まれています。噴出源は群馬県で、越後山脈を越えて流れてきました。上位の黒ズナと雑色はつめ石と同じタイプの岩質からなり、噴出源は野沢温泉付近と推定されています。

この火山灰が噴火した当時は中越全域の動植物は壊滅的な被害を被ったと思われます。

St.6 平野に堆積した魚沼層の礫層



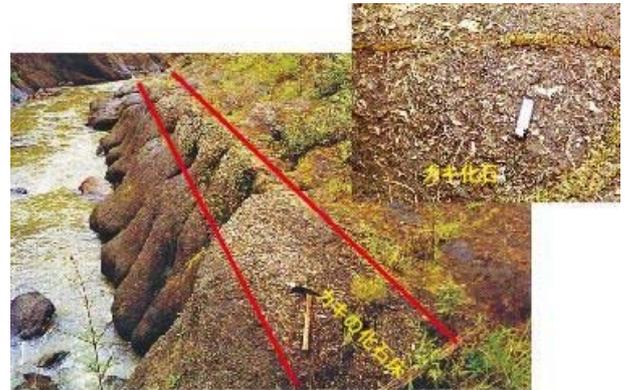
200 ~ 100 万年前頃はこの地域は平野でした。当時、南方や西方の新潟県境付近では地盤の上昇と火山活動が起こり、それらの地域から大量の土砂が運ばれてきました。

れき層のれき種から、越後山脈を起源とする河川も流れ込み、東頸城丘陵はできていなかったと

推定されます。

現在のような渋海川は当時、まだ流れていなかったとも考えられます。

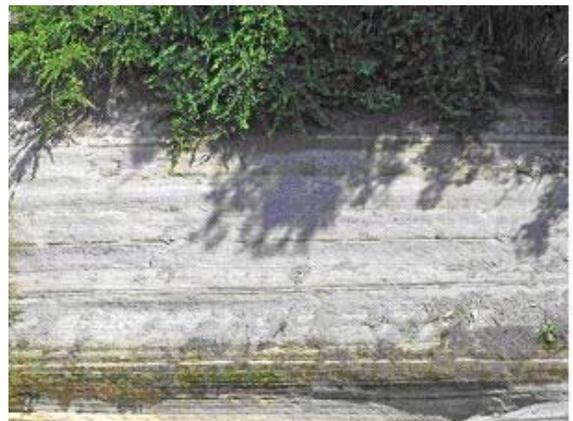
St.7 魚沼層のカキ化石床と含ガーネット火山灰



2 百数十万年前頃に日本海の河口付近で堆積した地層です。この付近では海から陸に変化する複数のサイクルを示す地層群が見られます。

砂れき層中には大量のカキ化石が含まれています。その上位には赤ワイン色のガーネットを含む火山灰層が挟まれています。

田麦川層



約 400 万年前には、この地域は日本海の深海でした。砂質泥岩・泥岩互層からなります。この地層は海底地滑りによりできたもので、タービダイト相とされています。

St.8-1 自噴する松之山温泉



日本三大薬湯の一つにも挙げられています。温度は 100 に達し、海水にいた塩化ナトリウム泉です。化石海水とも言われています。かつては、定期的に自噴する様子が観察されました。この写真は 10 年ほど前の自噴する源泉の写真です。

St.8-2 松之山層



約 900 万年前は深い日本海の海底でした。火山活動が起こり、写真は、その時に堆積した軽石質のギョウカイ岩層です。この中に黒い塊のように見えるのが、レンズ状にはさまれる泥岩層です。

泥岩層中には海にすむ魚類やクジラの化石が入っていることがあります。

St.9 深坂峠付近の渋海川の源流



関田山脈の深坂峠が渋海川の源流です。関田山地は渋海川流域でもっとも早く、海から陸に変化し、さらに山地化した地域です。それは今から、およそ 300

万年前です。地盤が上昇すると共に火山活動が始まります。米山の火山活動とほぼ同時代ですが、米山と異なる点は関田は陸上での火山噴火だったことです。噴出した溶岩流や火砕流が津南に流れ

込み、泥流は遠く小国盆地まで流れ込んでいます。これらの堆積物は、上下の堆積物より固いので尾根をつくり、尾根の北側が急傾斜で、南側が緩傾斜なケスタ地形をつくっています。

St.9 日本一の河岸段丘 - 津南段丘



信濃川とその支流によりつくられた河成段丘です。地形学の専門家から、美しさ・規模・広さ等から、総合的にみて日本一の河岸段丘としてもよいというお墨付きをもらっています。

最も高い(古い)谷上段丘は約 40 万年前頃に形成されたものです。この場所で観察される段丘は、全て中津川によってつくられものです。約 15~10 万年前の越路原や小栗田原の段丘は、ほぼ貝坂段丘に対比されます。約 15 万年前につくられた朴ノ木坂段丘以上の高位段丘は、越路や長岡には分布しません。

St.11 津南断層



津南盆地と東頸城丘陵の境界部には、津南断層が通り凹地帯となっています。写真の右側が隆起量の大きい東頸城丘陵側です。盆地に対して、平均して 1000 年で約 1m に変位しています。そのため、東頸城丘陵側の低位段丘が盆地側の高位段丘より高くなっています。凹地帯では、10 万年前から現在に至るまで低地帯で、湿地性の堆積物が積もっています。この断層の延長部は片貝断層や新潟平野西縁断層です。

St.12 宮中ダムの放流と日本一の信濃川

以前の信濃川は、夏などの渇水期では宮中ダムの下流域は、ほとんど水が流れていませんでした。現在では水がとうとうと流れています。

(当日の巡検資料を大地の会で編集しました。)

澁海川の源流を行く

星名松山

秋の日を『大地の会』の見学会 まだ見ぬ土地へと心は踊る

東西の山脈^{なみ}迫る谷間にて果つる事なく稲田は続く

瀬替へとは曲れる川を直ぐにして田地増^{てんぢふ}やさむ知恵なりと聞く

山を貫^ぬき瀬替遂げたる百姓の田を増さむとの意思を諾^{うべなう}ふ

段丘へ上がりて見れば田が拓け麓の村を足下^{あした}に見る

幾万年重ねて大地は盛り上がり昔の谷間が今世^{いまよ}見下ろす

谷間抜け小国の村に入り来り稲田広がり糸里整ふ

見渡せる山の麓に村がありその家家に秋日が注ぐ

この谷に民を統べたる豪族の『小国』を名乗るはさも有らむ事

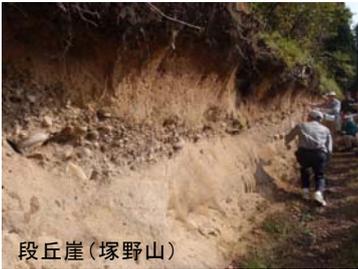
澁海川の源流尋ねてバス二台いよいよ狭き谷間^{あい}を行く

S字成す山と谷川直ぐにし瀬替への苦勞を村人^{むらひと}に聞きたし

道端の崖に触りて土質みるこの柔らかさは四紀^{よん}のものか

氣付きたる不思議が一つ此の川は砂利なき川底水音も無く

瀬替(塚野山)



段丘崖(塚野山)



澁海川(松代)



雪中隧道(洞門)

松之山温泉



深坂峠



マントパーク津南スキー場



宮中ダム



源流の浸食崖に蝸殻^{かきがら}と示されたるも吾には見えす

谷川に削られ出し崖縁に石榴石^{ざくろ}とて小粒光ると

村人が手掘りの洞門入り行けば遙か遠くの出口が眩し

洞門の上なる山を見上げつつ昔越えけん苦難偲^{おも}ばゆ

泉源は千万年前の海水とて熱湯吹き上ぐ山狭^{やまかひ}の湯場

急坂を上れば牧場の大草原動かぬ牛の小さく見ゆる

牧場の政風館^{やふた}の二階にて地元主婦等の接待を受く

峰道と深坂峠^{ふみ}の連分に県境の碑が威嚴^も以て建つ

澁海川は三方岳より生れ出て八十キロにて大河に会す

県境に立ちて眺むる信州は山重なりて人里を見ず

スキー場の頂点に見る絶景は大河の段丘妻有の里

宮中^{みやなか}の取り水堰は放たれて大河の水の音立てて越ゆ

道に沿ふ物産館に休憩し 夕闇迫る里を去りけり

父なる山、母なる河 - 渋海川の巡検 -

星名 松山

低い山並みを左右に見ながら、バスは川沿いの平野をひたすらに走った。緑深い里山と、刈り田が果てなく続き、行き交う車も少なく静かな行程であった。注目していた渋海川は深く流れて、橋を渡る時以外姿を見せない。そして用水堰がやたら目に付く。これは、渋海川兩岸の山々が浅く、灌漑用水を本流に求めているからと思う。

途中停車し、『瀬替』に付いての説明があった。川の曲流を真直にする事により、田の面積を増やす工事をしていたという。百姓の経験有る私には、寸土を求める農民の心が分る。突き出た山裾を掘抜いて川にしたり、真っ直ぐな新川を作り、古い川筋を埋め立て田にする。今も田面が低くなっている所があったが、古川を埋め立てた新川の採掘土が少なかった為であろう。

途中バスは段丘見学で坂道を上った。目の前に広々とした水田が開けた。田の水は何処から引くのだろう私は気になった。大昔この面が氾濫原だったろう今は村が崖下に有る。

バスは更に進んで、基盤整備で広々とした田の原に出た。中央の道に沿う駐車場に停まり、全員がバスを降り休憩となる。山麓の村々へ目をやった。明るい山里と言う感じで、小国町という。戦国時代小国氏発祥の地という。

バスはいよいよ源流を目指し、谷深い山地へと進む。この山地一帯の起源は、信州や上州の山々が噴火して、海底に溶岩が流れ込み、火山灰が降り積もり、更にそれが隆起して陸地になったとのこと。現状の陸地化は数万年前と聞いた。その火山灰層は何百メートルの厚さと聞く。触れてみて凝灰岩のような堅さは無い。だから農民は瀬替

瀬替(苔野島)



巡検風景



や洞門の大工事をやり得たのかと考えた。

この山地発生の話の中に、当時信濃川は存在しなかったのではと言われ、目の覚める思いがした。関田山地の無い時代、千曲川は高田方面に流れていたのではというのを、テレビで見たことがあった。

説明をきき感動したのは、『苔野島』の瀬替である。山間に深く刻まれたS字谷の直流化である。突き出た山の側壁に穴を開けて水を通し、山土を削って谷を埋めた。埋められた谷は田となり削られた山は畑になった。説明を聞きながら、旧谷川の田を見下ろし感動頻りであった。

この工事は渋海川の『青の洞門』だと思った。農民の苦労話が村に残っているだろうか。いつの時代のものか聞き漏らしたが、請負士がいて柏崎の人であったという。資料にも書いてある。

バスは幾度か谷を渡り山を抜けた。何処を走っているのか、配られた地図を見ても分らない。ひたすら窓外の景色に目をやる。

バスはトンネルを抜け、暫くにして集落が見えて来てほっとした。次ぎは中仙田という道の駅で有った。旗が五六本立てられ客待ちの体である。此処で谷川の傍迄降りて、地層の傾斜による地殻変動の激しさの説明があった。

とあるトンネルの前で休憩となった。説明では川中にルビーが有るとの話で一同川底に目を走らせた。なるほど川の石塊に鉛色の小粒が見えた。記念の一つと思わぬでも無かったが。足を濡らす迄もない事だと止めた。

ふと目を転じると、『手掘りの洞門』との説明



洞門入口(犬伏)



洞門内部

板がある。興味を引かれて、恐る恐る足を踏み入れた。そしたらどうだろう、少し進んだだけで一寸の先も見えない。進むか、退くか、瞬間小さな光が目に入った。節穴から見ているように、全く距離感の無い小さな世界である。緑の木々が風に動いている。そ、それは洞門の向こう側の出口が見えたのだ。戻る事にした。

ベンチで山を見上げた。洞門も何も無かった時代の山越え、特に冬はどうしただろうか、想像を絶する苦難な山越えを感じ取った。

地図は見えていても、何処を走っているのか見当が付かないが、松之山温泉の表示が見えた。

松之山温泉の谷へは山手から入り源泉を見学す。強烈な蒸気と熱水を噴出して居た。堆積層の下部から二千万年前の海水を、噴出して居ると説明があった。雪中婿投げで知られる薬師堂を見上げて、バスは狭い温泉街を下る。上りにも通った気がするのだが。

いま二万五千分地形図を見ていると、松之山山塊とでもいいたくなる渋海川に囲まれた地形である。頂いた資料には松之山層と書き込みが有り、900万年前の海底火山とある。何か説明も聞いた気がするが、私見の山塊説は外れても遠有不安

も知れない。

凌雲閣を見上げて威容に驚き、自刃した^{みさよし}房能の管領塚を思いながら通過となった。

いよいよ山また山の登り道、木々はすっかり冬支度で、残る紅葉も色あせていた。バスは遂に山の鞍部に達した。一面牧草の緑が眩しい。遠くに牛が三頭、一頭は寝そべて居る。窪地には小さな池がある。ここが大巖寺高原であった。

バスは峰道を走り、管理棟そばの洋館前に止まった。休憩所兼物産館である。だいぶ込み合っていて、我々は二階に昼食となった。地元の人達の接待でこの汁をいただき、しばし海拔千メートルの天空の気分を楽しんだ。

此処は戦後山の灌木を切り払い、牧草の種を蒔いて開いた牧場だと何かに紹介されていた。

高原の天気は変わりやすい。雲は低く霧雨を感じながら峰道を右に折れ、暫くして全員が下車した。縣境を示す石組みの塔が厳然と立って居る。左側が断崖絶壁で、信州の山並みは幾重にも続いていた。今地図を見ると、長野県の『野々海池』辺りであったと思う。また其の近くに^{みさか}深坂峠と表示が有り。「ここを下ると長野県だね」と誰かが呟いた。

ここからバスは下りに下る。どの道を通ったか、今地図を見て居ても見当が付かない。

バスは山道を走りに走り、次ぎには津南のスキー場である。全員がスロープの頂点に立った。麓には津南断層の黒い茂みが指し示された。信濃川の流れる水面を見せないが、河岸段丘に生える黒々とした森の一直線が、大河の存在を印象付ける。遠く魚沼丘陵が視界を限り越後三山の雪峰は姿を見せなかった。

更に山を下り信濃川を渡り、宮中のJR堰堤が発電中止で大河の開放された豪快な^{しぶき}飛沫を見学した。あとは津南町の道の駅に休憩を取り、信濃川左岸の薄暮迫るバイパスを一路帰途についた。

記憶の薄らいだ頭でペンを進めたので、間違いだらけと気になるが。頂いた資料を二度三度見てペンを進めた。資料作成の人の苦心の程が伝わって来る。私の地学勉強は皆様にお世話になりました。

(新潟市秋葉区 星名忠直:大地の会会員)

渋海川流域の人びとと歴史風土 - 信濃川水系の「河川文化」を考える -

前大河津資料館館長 近代地域史研究家 五百川 清

1. 人びとの歴史と志の発見

新発田出身の著名な脚本家で杉山義法という人がいましたが、阿賀北の新発田近郊あたりから題材をとって、毎年新発田で野外劇をやっていました。杉本さんは西郷隆盛を描いた「田原坂」という小説や大河ドラマ「天と地と」の脚本も手がけていた人です。

そんな杉山さんが、なぜ地方の阿賀北の劇を手掛けたのかということですが、以前日報の夕刊の随想欄に杉山さんが書いていました。「私は全国の日本人に『歴史は中央の有名な人物によってつくられてきた』というような歴史観を語ってきたのではないだろうか。そういうことで、ご自身の郷里の歴史を題材にしたわけです。確かに中央の有名な人物ではなくて、そこの人びとの足跡を劇にし、有名な郷土出身のスターを集めて演じられたようです。杉山さんが亡くなる前に打ち切られて以来、後を継ぐ人が無かったことが残念です。

司馬遼太郎にしても晩年は「街道をゆく」というシリーズを書くようになって、「街道をゆく 9」の「潟のみち」で、木崎村小作争議や亀田郷を取材しています。司馬さんがしばしば使った言葉で、「人びと (people)」というのがありますが、カッコ書きを入れるんですね。リンカーンの演説の中に出てくる people という言葉です。多勢の人間を表す時、支配者のもとにある民という捉え方に司馬さんはちょっと気に障るんでしょうか、私も気に障るんで使いたくないんですね。

「民俗」という学問研究の分野は、日本独特です。何々「民族」という学問はあるんですが、にんべんの「民俗」は日本だけです。どんな学問なのかというと、私たちのじっちゃん、ばっちゃんに直結する生活や歴史を学ぶことなのです。それは歴史といってよいのです。

少し前の時代では、農村史・農民史をやっている先生は、「偉い」先生たちに馬鹿にされたと聞きます。「百姓に歴史はあるの?」「豚や牛にはないだろう?」「天皇の歴史こそが歴史家としてやるべき仕事ではないか」と言われたそうです。(木村礎氏の講演ほかによる)



このように、人びとの歴史というのは中心に取り上げられることはありませんでした。私も定年まで教科書を教えてきましたが、郷土の話、父母の歴史はどうなのかというとなかなか分かりませんでした。でも長生きしたおかげで、また、川の歴史をやっているおかげで、郷土やそこに暮らす人々 (people) の歴史を感じることができました。

2. 大地と歴史との関わり

新潟大学高田分校で学ぶ機会を得たことは私にとって非常に大きなことでした。そこでたまたま歌代先生から地学概論を教えていただいたのが、私と大地との関わりです。先般、大地の会の講義で、渡辺文雄先生から、人と大地のかかわりという面で本当に興味深く楽しく話を聞かせていただきました。

新潟大学に小林昌二さんという古代史の先生がおられました。小林先生は、諸科学の学際的な研究の必要性を訴えられた人です。

和島遺跡で「沼垂城」と書かれた木簡が出てきたことから、沼垂城が実在したことが証明されました。そして沼垂城への関心が高まり、小林先生を中心に、歴史や地学等の先生とが共同で研究し、その成果を「高志の城柵」などの本にまとめました。その中で小林先生は「浅層地質歴史学」を提唱されています。

今まで偽地図として見捨てられていたものが、実は地学的な見地からすると相当考察の対象になる地図なんだということが示されました。そして、

「沼垂の柵」は、古津や新津といれていたところにあったのだろうと、推論を出した人もいました。小林先生を中心とした研究者たちは、今の沼垂の近く、ときメッセ付近の地層を掘って、水田の痕跡を見つけました。そこは全く海底の底ではなく、「地下探査」の結果、人びとはそこに住み、古代に水田を開き、大和朝廷の出先機関が存在したことを明らかにしようとしています。

越後平野の市町村史には、「広い平野の中の自然堤防上に村ができ町ができた」という筋書きがあります。自然ですからあえて自然堤防の歴史なんて調べなかった。ところが、ある地質調査会社の人がレーザープロファイラという方法で中之口川沿いの「自然堤防」を調査すると、自然の働きだけではなく、明らかに人工の、人が積み上げたものがはっきり出てきました。考古学的に調べて行くと縄文・弥生のそれらの時代などに人間の力を持って築かれたものがあるということです。

渡辺文雄先生が、棚田、瀬替えという、人によって造られた地形を語られましたが、確かに、地形を作るのは、自然という大きな営み以外にも人為的なものがあるのではないかと思います。大地の話のベースにして歴史を考えていくことは極めて大事なことはないかと思えます。

(小林昌二『高志の城柵』、上林好之他『沖積平野における縄文以来の河道と堤防の形成過程に関する研究』ほか参照)

3. 渋海川の斜め写真を見て

越路町史の民俗編には、大地と人びとの歴史とが密接に結び付けて記述されています。「渋海川や信濃川流域に広がる田地、渋海川東側の丘陵地に展開する田畑、そして西部地域の山地に点在するヤマダ、ヤマバタケなどは、先人たちが雪国という宿命と毎年繰り返す大小河川の氾濫の中で長年にわたり知恵と努力で造成し、守り続けた耕地であり、こうした田畑は洪水に苦しみ開田に汗を流した歴史が示すように決して一人ではできなかった。」まさに人びとですよね。「人びとは力を合わせ、その時代の土木技術の粋を尽くし、田畑に必要な用水を確保し、新しく造成したものであった。そうして田畑にならない山地や荒野は日々の燃料や用材を得る為に木を植え、村決めをして薪や萱や山野草の乱伐採を避け、お互いの村での暮らしを豊かなものにしてきた。」

こういう形で民俗編には書かれていて、そこには偉い人の名前はありませんが、大地というものと密接に結びついた私たち人びと(people)の足跡が綴られています。

さて、このような越路の渋海川を斜め写真(小川幸雄氏提供)で上流から順に眺めていきます。

上流の塚山橋のあたりから出発していくと、長谷川邸が見えます。そして、塚野山、河岸段丘の地形が見られます。信越線、ここに瀬替えがあります。蛇行に着目して、ここを田地に切り開いていきました。そして西谷の古川、西谷の湯、温泉というよりは鉱泉ですね。これも大地と人との関わりです。



塚野山地区の渋海川



岩田・不動沢地区の渋海川



勝平城跡

どんどん下るとやがて谷間が開かれていきます。勝平の山容はまさに山城という景観です。この勝平城跡は、御館の乱とも関係しています。ふだんの行政を行う館は山麓部におかれますが、いざという時には、山城に立てこもるんですね。今の戦国史では大事な点なんですけど、いざ戦争になるとほとんどの領民も山城にたてこもりました。というのは「人力」というのは実に大事な資源だったので、戦争に負けると領民はさらわれてしまうわけです。したがっていざというときには山城に立てこもって領民自身も守られる存在でした。（藤木久志『戦う村の民俗を行く』ほか参照）

そして飯塚。今の頭首工のあたりに堰がありました。昔は、用水が必要な4月から9月に、川に土を盛り込んで、「草堰」を作っていました。そして、秋以降はそれを取り払い、舟運に使っていました。用水堰を巡る紛争は、町史の中で大きなウエイトを占めていて、岡村権左衛門も深く関わってきます。私も非常に興味を持っています。

さらに下流に行くと越路原です。ここは戦後の食料難打開のために、水をくみ上げて開墾を進めた場所です。その過程で百塚という貴重な塚も多くは取り除かれてしまいました。

そして、信濃川本流に流れ込む末流になります。須川は当初、渋海川に注いでいましたが、水害対策のため、流れを変えて信濃川に注ぐようにしました。飯島などの洪水常襲地の耕地では、割地制（農地を一定期間ごとに交換する制度で、農民の年貢負担を均等化する役割があった）が行われていました。

4．歴史遺産からの話題提供

越路にも塚がたくさんありますが、おもしろいのは飯塚（めしづか）、お汁塚（おしるづか）があることです。戦後の調査によれば、塚の中は空っ



おしる塚

ぽでした。でも考えてみると、神社は小高い土地に造られ、五重塔とかそうした寺院の建築の場合でも、高く高くそびえていきます。そこに宗教的な意味があるように思いますね。掘って何も無かったというより、塚そのものを盛り上げて造ったところに、何らかの宗教的な意味があると考えてもおかしくないと思います。

ご存知のように日本は神仏習合でした。中央の偉い先生方の中には、日本人は無宗教だといえます。ヨーロッパのキリスト教一神教が宗教というのであれば、確かに日本にはそういうものはあたりませんが、決して日本人に宗教がないということはないと思います。古来から神仏習合、宗教があったことは、塚からもうかがうことができます。

今日もそうなんですけど、来迎寺という駅に降りると、何か宗教的な雰囲気を感じます。駅前には小さなお堂があり柳観音があるのですね。いつも私は貴重な場所に来たなという感じを持つのです。先回も越路を歩いてみるに、寺があり社があり、これらが町全体を包み込んでいるような感じを受けるんですね。じいちゃん、ばあちゃん、人びとが大切にしてきたものです。ところが「生活大革命」と称して、高度成長期の中で、祭りがなくなり、寺の後継者が無くなりして、昔のようにはいなくなってきました。地震の復興でも一番難儀したのが神社の再建復興だったと聞いています。こうしたことが今の世相に現れているんじゃないかと感じたりもします。

来迎寺という地名は、「来迎寺」というお寺の名からきているといわれています。お寺そのものはなくなりましたが、地名として残っている、ということのようです。沢下条の金剛光寺や飯塚の明鏡寺も古いお寺です。

神仏混合の神社もたくさんあります。朝日神社には、仏教の剣権現も祀られています。越後一ノ



朝日神社

宮弥彦神社も神仏習合で、江戸時代には阿弥陀参りも行われていました。神社の真ん中に阿弥陀堂があったようです。

越路で注目される宝徳稲荷大社は、宗教というものの成り立ちを考えさせてくれます。全国の多くの神社は、由緒があっても、いつ誰が持ってきたか分からないものがほとんどです。新しく盛んになった宝徳神社も同じように歩いていくものと思っています。

越路町にはありとあらゆる神社が結集しています。まさに越後平野信仰の原点といえます。松尾は酒の神様です。羽黒、天神、愛宕、石動もあります。これらの修験者は山伏といわれていましたが、彼らは今の医者のような役割をして各村々で活躍していました。十二神は、もともと熊野の神を祀ったものです。東頸城では特に十二神社がたくさん残っています。諏訪社は諏訪湖の神様ですが、新潟県には長野県よりも多くあります。水の神様で、信濃川水系に沿ってみられます。戦時中には武の神様と言われていましたが、実は水の神様であり農業の神様です。

ところで、伊勢神宮には内宮と外宮があって、内宮には天照大神、外宮には農事の神様、豊受大神を祀っています。伊勢神宮を総本社とするのが、全国に数多くあり、越路にもたくさんある神明社です。江戸時代には「お伊勢参り」が盛んでしたが、こちらは外宮の豊受大神をめざしてお参りに行っていたものです。(越志徳門「川と民話」(『河川文化』その16)ほか)

巴が丘のもみじ園は、豪農高橋家の庭園でした。高橋家も含め、薬九層倍(くすりくそうばい)=薬屋さんは儲かるんだといわれています。高橋家ではおもに骨折の薬を扱っていたようです。新潟の宮尾家、木村家、阿賀野市の五十嵐家なども、薬商売で財を築きました。なぜか河童から薬の秘伝を教えてもらったという言い伝えがたくさん残っています。

農民は商才がないといわれますが、豪農にみるように、農だけをやっていて莫大な富を蓄えることはできるでしょうか、横越沢海の伊藤家は、商売を通じて富を築き、農地を拡げていきました。青森にある太宰治の生家津島家は貸金業で富を築き、大地主になったようです。今の消費者金融よりはるかに高い利子だったと思われる。

小説「天地人」のテーマは、武士道の「義」や

「愛」ですが、これも検討すべきです。江戸時代に入ると土農工商で土農分離が行われますが、戦国期の武士はもと百姓です。でも、百姓=農民ではないのです。商人も、大工も、船頭も何もかも、そういう百ものたくさんの職業の人びとを総称し百姓なのです。

豪農の長谷川家は、まだはっきりと武士というものが分けられていない時代の土着の侍がルーツではないでしょうか。長谷川邸の家訓を読みますと、なかなか義と愛に貫かれたことが書かれています。武士道の愛と義ではなくて、「農民道」というか百姓、人びとが、義と愛という人の道を行ってきたのではないのでしょうか。

最後に、越路町の義民、岡村権左衛門を題材にした歌、三浪春夫の「から傘連判状」を聴いていただきたいと思います。

江戸時代に渋海川の水争いが元で、新しく長岡藩領に組み入れられることになった渋海川流域の村々では、大幅に増えた年貢に苦しみました。農民を救うため、岡村を中心に村の代表が立ち上がり、年貢を減らすよう藩に直訴したのが、から傘連判状です。結局岡村は死罪となりましたが、その功績は後世にも伝えられています。そしてこのようなすばらしい歌もつくられました。



からかさ連判状の碑

(講演内容を大地の会で要約しました。文責は大地の会にあります。)

渋海川の源流ツアーを開催しました

(財)こしじ水と緑の会 西山 拓

昨年10月31日に渋海川の源流を訪ねるバスツアー「渋海川源流ツアー」を開催しました。

皆さんご存知の通り、渋海川は旧松之山町(十日町市)の三方岳に源を発し、関田山脈の山あい流れ、旧川西町、旧小国町、旧越路町を貫流して長岡市下山で信濃川に合流する流程82kmの一級河川です。

長岡出身の私は、渋海川には子どもの時に魚釣りに来た思い出があります。信濃川の合流部のすぐ手前がある水門(当時“青水門”と呼んでいた)で、春から夏にかけては放課後毎日のように魚釣りをしていました。

その当時、青水門は子どもたちの賑やかな声であふれていましたが、先日行ってみると、子どもたちの姿は全く見えませんでした。かつて、近くの川や里山は私たち子どもの格好の遊び場でしたが、時代の流れとともに、残念ながらそのような子どもたちがいなくなり、川や里山にも関心が向けられなくなったようです。

そのような中、今回のツアーは、市民の皆さんにもう一度身近な自然に目を向けてもらおうと企画いたしました。

今回、参加者募集のために地元の越路地域に町内回覧をしたところ、多くの方からお申込みをいただき、反響の大きさに少々驚きました。それだけ市民の皆さんが、渋海川に興味を持っていることに嬉しい気持ちになりました。

渋海川には、新田開発のために人工的に流れを変え、新田開発を行った「瀬替え」が多くみられます。当日講師役を務めてくださった大熊孝先生によると、江戸時代から昭和の初めにかけて数百年の間、瀬替えによる新田開発が行われたそうです。その瀬替えを何箇所か見学しながら、上流へとバスを進めました。

旧松之山町の天水越に入ると、源流碑がありました。ここからが1級河川渋海川の始まりのようです。しかし、本当の源流はさらに上の深坂峠にあります。源流碑の見学後、キャンプ場のある大蔵寺高原を越え、深坂峠を目指しました。



渋海川に生息するアブラハヤ(撮影:井上信夫氏)



甚平新田(長岡市西谷)



渋海川源流碑

深坂峠の少し手前の道路脇に一筋の流れがありました。とうとう源流までたどり着きました。渋海川は、深坂峠付近から湧き出る水が幾つか集ま

って流れをつくっていました。写真の源流をさらに登ると湿地になっており、その壁の下の直径20cmほどの穴から水が湧いていました。参加の皆さん、普段見ている川の源流を見る事が出来、大満足のご様子でした。小さな流れが集まって大きな流れになる、自然の壮大さを感じさせられたひとときでした。

ツアーの最後は、松之山里山科学館キョロ口に立ち寄り、大脇学芸員の案内で美人林を歩きました。美人林では、ブナの実を拾って食べてみました。これが以外とおいしい。クマが喜んで食べるのも納得です。また、ブナ林が雨水を貯水する天然のダムであることを、大脇さんが説明してくれました。短い時間でしたが、松之山の豊かな自然が渋海川の流れを育てていることが良く分かりました。

1日のツアーを通して、参加の皆さんに渋海川に目を向けてもらうきっかけを作ることが出来たと思います。これを機に、少しずつでも身近な自然に目を向ける人の輪が広がっていけば幸いです。



渋海川の源流のひとつ（上から降りてくるのは大熊先生）



美人林でブナの実を捜す参加の皆さん



深坂峠から松之山を望む

雪像つくり皆で勝ち取った敢闘賞

鷲山 厚

3回目の挑戦で悲願の敢闘賞を勝ち取った。冒頭から理屈ばいが「敢闘賞」の「敢」は藤堂漢和によれば「あえてする。圧迫や気兼ねをはねのけて思いっきりやる」意味である。

思えば、それは1本の電話で決まった。中野雅子幹事長から今井俊夫氏に「スノーフェスティバル・in越路」での「大地の会・雪像つくり」監督依頼である。去年のテーマ「富士山」での功績・実力からして適任である。雪像つくりはリーダーがしっかりしていないと上手くいかないことは実感済みである。2月13日に向け動き始めた。

1月23日の新年会の席上、雪像のテーマ？募集があった。自分は去年の大地の会のテーマである渋海川を遡るまとめとして「渋海川 サケ遡上」を挙げた。席は酔いに委せ賛成ということとなった。観念としては良いと勝手に思っていたのだが、後日、今井氏に具体的にどうするのかと問われ逃げ道がなくなった。今井氏は緻密な人で、自分の考えが目に見える位に具体的でない為、テーマでもう負けた！という。

彼は考えたのだろう？2月6日に村上にサケを見に行こうと言い出した。この時期サケなど居ないのにも思いながらもサケならぬ網に引っかかったのは永井さんと自分である。それも新潟県人なら忘れないあの2月6日県内中が猛吹雪で視界1~2m位の日である。イヨボヤ会館到着に3時間かかった。先ず見る前に腹ごしらえで鮭定食を食べサケ体感。

実際、会館でサケの写真やリアルなレプリカやマンガチックなサケもあり、なんとなく行けると感じた。安易な自分は心にマンガで行こうと決め、楽になった。が・・・帰りは怖い・・・外は地吹雪、高速は通行止め、あの中越地震の時と同じく下道で結局6時間かかった。

今井氏が「大地の会」の連絡メールに村上珍道中記に写真を入れて掲載したら、多くの人から様々な反応やら励ましやらを頂いた。特にサケより地吹雪写真（雪中行軍・八甲田山並み）が共感を得た様子！であった。

大地の会のネットワークは素晴らしい！会員で新潟市在住の（旧姓）小林容子さんのご実家が十日町という関係で十日町市や中国で雪像つくりをする蕪木氏が雪像つくりの手ほどきをして下さる。

という事で小川会長、永井、中野、大谷、今井、鷲山の6名で2月11日伺った。ところが先方は津南中学・美術の村山先生他数名の方が集まりご教授下さった。自己紹介をし、去年の作品をお見せし、一笑されレベルがばれた。堪りかねた村山先生、油粘土でサケが口を大きく開け跳ね、下が波の様子を即座に塑像にされた。求めていた立体像である。また雪像つくりには7つ道具が必要なのもはじめて分かった。小業で硫安が雪を凍らせる魔法ということも分かった。早速帰りにムサシにて求む。



「渋海川 鮭遡上」

当日監督の今井氏が仕事で遅れる！あせり始めた中で、渡辺秀男先生と大谷さんがサケの塑像を見ながら雪の塊にスプレーをし、荒削りを始めた。他の者は首に村上製サケのレプリカ写真を下げ、共通認識をして作業にとりかかった。始めはタイヤキだ、鯰だと言っていたが、監督の登場とともに芸術の域に入り、7つ道具が大活躍。手を動かす人、口だけ動かす人様々だが今回はメールでの応援もあり「大地の会」という硬い分野が「雪像部会」発足で、遊び心を掴み、良い統合機能を果たしたと思います。山崎先生曰く「渋海川のサケが 祝いサケ」となる。

正に「敢て」の勝利である。



平成 22 年度「大地の会」春の野外観察会

「糸魚川ジオパーク」観察会のご案内



小滝川ひすい峡



断層露頭

今、世界中から注目を浴びている「糸魚川ジオパーク」の観察会です。
学芸員の竹之内さんから糸魚川ジオパークの魅力について一言をいただきました。

「糸魚川ジオパークは、日本最初の世界ジオパークです。すぐれた大地の遺産があって、大地と動植物、歴史・文化との関わりが明瞭であり、楽しく見学できるシステムがある場所がジオパークです。糸魚川には、世界最古のヒスイ文化、日本列島を東西に分ける大断層、北アルプスが落ち込む断崖・親不知、深い洞窟をもつカルスト地形、地すべり地に広がる棚田、活火山・焼山などがあり、大地の生い立ちを学ぶのに最適です。糸魚川ジオパークには、24 のテーマをもった見どころ（ジオサイト）が準備されています。一度では回りきれませんので、何度でも足を運んでみてください。今まで気づかなかったジオの世界が見えてくることでしょう。」

世界的な大地の遺産に触れることのできる、またとない機会です。
どうぞ皆様ふるってご参加ください。



須沢海岸



焼山噴煙

日 時 平成22年5月16日（日）8時30分集合

8:45 出発 17:30 解散（予定）

集合場所 長岡市越路支所（長岡市浦 715 番地 TEL ）

対 象 どなたでも参加できます。定員 40 名（子どもさん大歓迎！）

案 内 フォッサマグナミュージアム友の会の皆様

参加費用 500 円（資料代・保険料含む）・小中学生・高校生は無料

申し込み 5月10日（月）まで電話又はメールでお申し込みください。

電 話：越路支所地域振興課教育支援係 0258-92-5910

メール：koshiji@daichinokai.sakura.ne.jp（大地の会事務局）

【件名「観察会参加」、氏名、住所、電話番号（携帯）、緊急時連絡先、年齢をお知らせください。】

その他 昼食をご持参ください。 マイクロバスで行きます。

主催 「大地の会」／越路公民館

ハイチ大地震災害復旧・復興支援募金活動を実施しています。
大地の会では、国際復興支援チーム中越に参加してハイチ大地震支援募金活動を実施しています。

チーム中越は、7.13 水害、中越大震災、中越沖地震と度重なる災害を受けた中越地域に寄せられた世界中からの支援に応え、中越の想いと経験を伝えようと結成されました。今までに「ミャンマーサイクロン・中国四川省大地震」「フィリピン沖地震・サモア地震・フィリピン水害」などの支援募金活動を行ってきました。大地の会では越路スノーフェスティバルでの募金活動とともに越路支所に3月31日まで常設募金箱を設置しています。皆様のご協力をお願いします。



越路スノーフェスティバルでの募金活動

東山油田（史跡・産業遺産）保存会の活動紹介

当保存会は商工業都市長岡の発展の原動力となった東山油田の恩恵やその歴史・産業遺産を後世に伝えるべく活動しています。ここ3年間は、東山油田写真展（講演会併設）・現地巡検会・小学生の油田学習支援などをおこなってきましたが、今年も長岡市市民活動団体助成事業補助金をいただき、東山油田の「近代化産業遺産」認定へ向けての新たな活動を展開しつつあるところです。

これまでに市内各地で次に示すように5回の講演会を実施しました。

- 2月6日 三島・与板地区「鳥越・与板地域の油田と長岡鉄道について」
- 2月7日 寺泊・和島地区「日本石油と尼瀬油田、和島出身の宝田石油創業者山田又七について」
- 2月11日 越路・小国地区「小国出身の山口権三郎と日本石油について」
- 2月13日 中之島・栃尾地区「中之島地区で採取された天然ガスと栃尾鉄道について」
- 2月20日（全域）「宝田石油創業者山田又七について」

あとは今年度最大の取り組みである3月20日の「東山油田シンポジウム～「産業遺産」としての保存に向けて～」（13.30～長岡大学＝御山町）を残すだけとなりました。

石油やぐらなど貴重な遺産が撤去されることになる閉山（現在は休鉱中）への動きも報じられています。明治戊辰戦争からの復興を支えた長岡東山の大地の恵みを、何とかして後世に語り残せるようにしたいものです。

会員募集！仲間づくりにご協力をお願いします

大地の会では、大地の成り立ちや防災、環境、遺跡など我々の生活に関わる地学の課題をともに学びあう仲間（会員）を募集しています。知り合いの方々に声をかけていただき活動の和を広げましょう。ご協力をお願いします。

年会費 個人 1口 1,000円（中学生・高校生は無料）

家族会員 500円（同一生計は何人でも）

（講座・巡検参加の際は資料代等年会費とは別に500円程度必要となります）

賛助会員 1口 10,000円

申し込み先：長岡市越路支所地域振興課教育支援係又は大地の会役員をお願いします。

会報「おいたち」への投稿をお願いします。

「おいたち」は大地の会の活動内容を参加できなかった会員への報告や地学・地域づくりに関する情報提供を行うとともに、会員同士の意見交換・情報交換の場です。記事掲載のご要望や投稿をお待ちしています。

賛助会員紹介

国際石油開発帝石株式会社
朝日酒造株式会社
株式会社エコロジーサイエンス
有限会社越路地計
大原技術株式会社
有限会社広川測量社
高橋調査設計株式会社
株式会社長測
有限会社中越測量社 順不同

大地の会会報 おいたち 60号

2010.3.10 発行

大地の会 会長 小川幸雄

問合せ先

〒949-5493 長岡市浦715番地
長岡市越路支所地域振興課教育支援係
担当 桑原浩志 TEL 0258(92)5910

事務局 e-mail : koshijj@daichinokai.sakura.ne.jp

大地の会 URL : <http://daichinokai.sakura.ne.jp/>